

かつて、明らかな嘘を並べる被疑者に「でたらめ言うな」と怒鳴ったこともある坂東さん。ところが「初対面の刑事に、いきなり本当のことを言うわけねえだろ」と怒鳴り返されてしまった。「『……なるほど、もっともだ』と、妙に納得させられましたね(笑)」。それから坂東さんは、被疑者・参考人から話を聞く場合には、できるだけ笑顔で臨むように。

刑事を前に警戒している相手に対し、「この人とは話しやすい」と思わせるために、相手がどのような生活サイクルで暮らしているのか相手の立場も考慮した。

例えば、不法滞在してラーメン店で働いていた被疑者の件で店長に話を聞きに行く場合は仕込みで忙しい時間は避けるなど、刑事側の都合を押しつけない配慮を忘れなかった。

さもなければ、働き手を奪われていたら立っているところに、何度も足を運ぶことになるからだ。

「相手は人間。損得勘定を抜きにした関係を築くことが大切」。

CASE 2
「デカに本音で話す
訳ねえだろ!!」



坂東忠信さん

1986年、警視庁に入庁後、交番勤務員、機動隊員、刑事、通訳捜査官として、警視庁本部をはじめ新宿、池袋などの警察署で勤務する。2003年に退職。以後、作家、防犯講師、司法通訳として活動中。

2. 基準となる行事を
何回過ごした？

中国人にとって旧正月に当たる「春節」は、欠かせない行事。この春節を、日本に来てから何度過ごしたかを尋ねる。ここでは、「春節を2回過ごした」とする。7月の入国を起点に、春節を2周する線を引く。

■坂東さん秘伝、「ぐるぐる時系列」とは？

時系列サイクルで
正確な日時を割り出す

坂東さんが編み出した「ぐるぐる時系列」。一日、一年などの1サイクルを繰り返すためのものだ。ここでは「2008年8月に逮捕された、不法滞在中国人の供述から、時系列を整理する」という架空の設定を基に、「ぐるぐる時系列」の書き方を解説する。

1. ひとまず、
何月かを割り出す

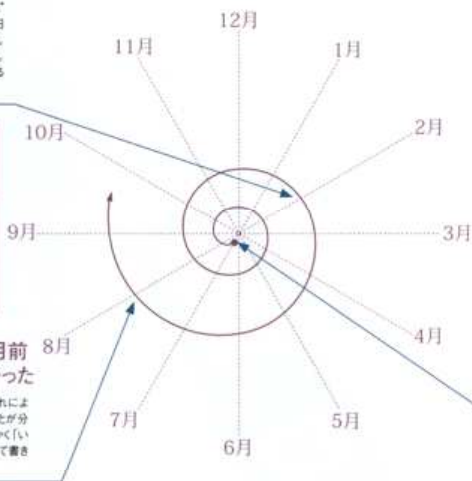
「日本に来たのは、何年前のちょうど今頃だった」という供述の詳細を追求し、7月であることを確認。ひとまず7月に印を付ける。

相手にとって重要な
イベントを起点に

「この方法は、日本人にも使えます。中国人の春節のように、お盆やクリスマスなど、相手にとって重要な行事を基点にすると、話を進めやすいでしょう。A4用紙を使うと、書き始めのスペースも大きくなります」。

3. 入国は1年1カ月前
だったことがわかった

逮捕が2008年8月なので、これにより入国が、2005年7月であることが分かった。あとは必要に応じて、細かくいつ、何があったのかを聞き出して書き込めばよい。



『通訳捜査官』

経清野
坂東忠信・著
定価1,260円(税込)

警視庁勤務18年のうち約半分を、中国人被疑者の各種取り調べなどに、通訳捜査官として立ち会ってきた著者がつづけるノンフィクション。現場に出なければ刑事でさえもあまり知らない中国入国犯罪の現状と警察官・刑事の苦闘を、通訳捜査官の視点から、淡々とつづる。身近な外国人犯罪や、ドラマではない警察、刑事のリアルな活躍などうかがい知ることができる41冊。

通訳捜査官とは？

外国人被疑者取り調べ時の通訳はもちろん、外国人参考人・関係者の通訳、外国人の逮捕現場、ガサ入れなど、外国人犯罪のあらゆる現場に携わるスペシャリスト。坂東さんは北京語の通訳捜査官として、主に中国人犯罪者を相手に活躍した。



「安いボールペンを数冊削ってつくっただけ」ながら、坂東さんにとって欠かせないアイテムの黒と赤のボールペン。聞き込みの時は、相手の話す速度で芯の出し入れや持ち替えることなどに重要箇所を赤でマークしていた。ちなみに、元々は競馬場でのこのボールペンを使っている人を見かけたのがきっかけ。

元捜査官に学ぶ
話の引き出し方

編集者やライターでなくても、人から話を聞くプロに得るものは多いのではないだろうか。まずは通訳捜査官として中国人犯罪者の取り調べなどで活躍した坂東忠信さんに話を聞いた。

収集する

整理する

活用する

CASE 3
ぐるぐる時系列

話を聞いてみると「大昔」だという。しっかりと聞くことで3週間前の話だった。話し手と聞き手では時間感覚が異なる場合もある。

当初はこの違いに混乱し、思うように調査が書けなかった坂東さん。しかし経験を重ねるうちに、時系列を円周上に記載する独自の記録法「ぐるぐる時系列」(図)を編み出し、以降はすんなり調査をまとめられるようになった。

「相手の記憶を整理しつつ話を聞くと、正確な情報を引き出しやすい。記憶なんてあやふやですし」。接着剤でつなげて作った、黒と赤のボールペンも重宝した。このボールペンは、黒と赤を同時に切り替えられるのが特徴。これは警察学校のリスニングの授業で聞き取れなかった中国語を赤字でチェックするため使っていたもの。相手の話す速度で、持ちかえることなく、重要箇所を瞬時にマークできて重宝した。

自分に適した聞き出し方を編み出し続けたことが、坂東さんの捜査官人生を支えていたようだ。

CASE 1
「反省」はするもの？
させられるもの？

警察学校で北京語を学び、ネイティブと同レベルまで北京語を操れる坂東忠信さん。しかし、単に北京語の読み書き・会話ができるだけでは、通訳捜査官としては務まらなかつたという。

「例えば「反省」と聞くと、日本人は「自分がするものだ」と思いますがよね。一方、中国人は「相手にさせるものだ」と考える。いい悪いではなく、単に価値観の違い。話を聞く相手の文化を知らないという正しい情報を得られません」。

どのような意味でその言葉を使っているのか。相手がどのようなコミュニケーションに属しているのか、どのように生まれ育ったのか、ということを考えるのが話を聞くときの基本だ。

参考人から話を聞く場合は被疑者との関係が友好的か敵対的かで、得られる情報は異なる。

「被疑者の親族から本当の情報を得るのは難しいんです。だから敵対する相手から聞くことも必要。つまり「情報を提供する」ことにアメリカンを感じさせてはだめなんです」。